

F ACULTY D DEVELOPMENT

I N V I T A T I O N

山梨大学教育人間科学部
第 13 号
Mar. 18, 2005

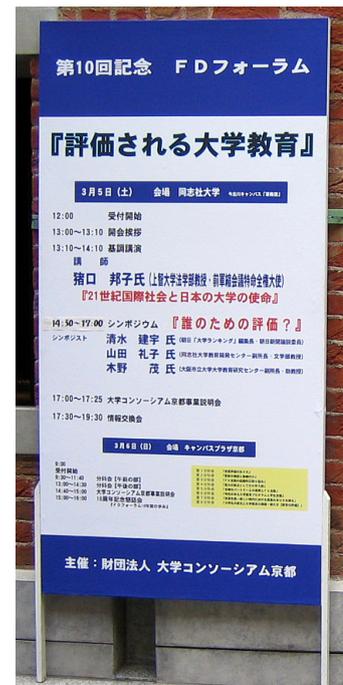
衝撃の第 10 回京都 F D フォーラム！

3月5日、6日に、大学コンソーシアム京都が主催する第10回FDフォーラムが、同志社大学および「キャンパスプラザ京都」を会場に開催された。「すごい」会である、かねてより聞いてはいたが、FDについて語ろう・学ぼうという人々(多くは大学の教職員)がこんなにも集結するものか、と驚きを禁じ得なかった。初日の講演は、850名ホールに立ち聴き者がたくさんいた。

「FD」は、関心の有無がはっきり分かれる営みではある。自分とは無関係とと思っている人々も多くいるのも事実である。この京都フォーラムに集った人々は、とりわけ関心の強い関係者ということができようが、同じ志向を持った者が、あることをまなび合うエネルギーのようなものすごさを感じたのが第2の驚きである。早い者勝ちといったことが、FD活動にも言えるのだろうか、情報技術を駆使し、情報用語で語られる「教育論」にはやや閉口したがFDの中身より、FD活動をより広く示し、自分たちのやっていることの価値をより速く、より鮮やかに見せる場であった。それがフォーラムかもしれない。

自分の授業改善は、「見えないところで黙々と努力するもの」と教えられ現場教師をしてきた小生には次のような違和感も覚えた。(1)授業論なのに、教育学、教育心理学者の顔が見えてこない。(2)やはりFDも専門教育化への反動なのか。(3)評価慣れ、評価疲れの大学にFDは何をするべきか。(4)ヒットしないFD活動はダメなのか…。(5)自分の努力は形にして見せるべきなのか…。

この京都フォーラムには本学の教職員も参加された。個人的な感想等を寄稿していただいた。学部FDを考えていく上での参考にしていただければ幸いである。(H)



大学コンソーシアム京都には、わずか1年間で3回も足を運んだことになる。昨年2月と12月に第1回、第2回の高大連携教育フォーラムにそれぞれ参加し、今回は第10回FDフォーラムに参加することになった。いずれも広報委員として参加したものだが、高大連携にしるFDにしる、全国の大学の関心や盛り上がりを目の当たりにすると、ある種の焦燥感を抱かずにはいられない。そして、委員としてだけではなく、一教員としていずれも大いに益するものがあった。

今回の第10回FDフォーラムのテーマは「評価される大学教育」で、まさに旬の課題をさまざまな形で考えとらえることができるようにコーディネートされており、いやが上にも大きな期待感をもって臨むことができた。

第一日目は上智大の猪口邦子氏の基調講演に始まった。国際政治学者らしく、今起こっている国際問題をとりあげながら、本テーマに即した大学授業論へと展開し、自身の授業方法を紹介した。その中で、印象的だったのは、大学教師に求められるのは、一年を通して体系をもって講義できることであり、そのためにはその分野の最先端を知っていることであること。また、誰が何と言おうと、今行っている私の授業は「日本一の講義内容である」との自負をもって臨むこと、であった。豊富な体験や経歴を持つ氏ならではの自信に満ちた講演に、千人を越す会場は圧倒された。

続いて行われたシンポジウム「誰のための評価？」では、「大学ランキング」編集長清水建宇氏が、大学ランキングづけの意義を説いたが、もう一つ釈然としない部分があったことは否めない。大学ランキングを支持したのは理系の学者であり、文系の学者は拒否の姿勢が顕著であるとした説明には興味を引いた。私が文系であるがゆえに、ランキングそのものに釈然としなかったのだ、と変な納得をしてしまった。また、評価は学生のため、大学教育をよくするためであり、それには他者評価は欠かせないこと、そしてFDがトップダウン型からボトムアップ型に進化させることができるか、との発言が印象に残る。本学は当初からボトムアップ型に理想を求めFDワーキングが組織され活動している。理想の実現を果たしたいものである。

第二日目は第二分科会「意欲の喚起と動機付け」に参加した。三氏による報告が行われ、三番目に登壇した筑波の産業技術総合研究所の主任研究員井上公氏のプレゼンテーションには、その豊富な内容と話のうまさに舌を巻いた。レジュメには「超伝導と磁場の物性入門」とあり、物理学とは縁もゆかりもない私は、退屈な時間になると覚悟していた。しかし、ポロシャツにジーンズのいでたちの氏は興味深い画像を次から次へと繰り出し、軽妙に興味深く解説し始めた。そのユーモアたっぷりの語り口に魅了された会場は、四十分間爆笑のるつぼと化した。興味・関心をもたれそうもない難しい内容をいかに平易にかみ砕いて解説し、映像と語り口で興味づけるかを井上氏は身を以て教えてくれた。教育に直接携わらない研究所に勤務する氏によって、物理学への意欲の喚起と動機づけをこれほどまで絶妙にされてしまい、教育の場に身を置くものとして恥ずかしさすら覚えた。最後に、氏は「意欲の喚起と動機づけは自分が講義する分野に関しては、誰よりも自分が愛している一番であると信じていけばそう難しいことはないんじゃないですか」と、笑い涙をふいている我々に投げかけて締めくくった。この言葉は第一日目の猪口氏の「日本一の授業」の話と符合することから、今回の京都での結論として持ち帰ることとした。

京都FDフォーラムに参加して

教務課 入倉洋子

地域貢献の高大連携担当者として、京都のFDフォーラムに参加させていただきました。

上智大学法学部の猪口邦子教授の基調講演。目の覚めるような真っ赤なスーツとバイタリティあふれる態度に先ず圧倒され、「何よりも、今日の講義が輝いていることが大切」という自信にあふれた言葉、学生にとって必要なことは表現力と認識形成力であり、そのために国語力と外国語力を養うことが必要で、学生に毎週 1,000 頁の本を読むことを課しているというお話は迫力がありました。

2日間のフォーラムをとおして感じたことは、基調講演、翌日参加した分科会「高大の接点としての大学入試」とも、現在の学生に不足している学力として、本を読む力、文章を書く力を強調していたことであり、そのためにさまざまな方策が採られていることでした。

分科会では、高大の接点としての高大連携、大学入試、入学前教育、入学後の導入教育が話の中心でしたが、特に入学前教育、導入教育の実践例として取り上げられていたのが、本を読み、要約文を書かせるという文章能力の向上に関する取り組みでした。推薦入試やAO入試など早い時期の合格者を対象に、毎月本を読んで、その要約を提出することを義務づけ、その添削を民間業者や退職された高校教員に依頼し、大学教員が見直し、学生に送り返す。ここまでやるのか、と思う実践例がいくつか紹介されました。

また、出前講義の話題の中で、出前講義を受けた生徒が受験してくれない、本音はうちの大学に来て欲しい、しかし、これからは大学が社会貢献の使命として「高校生を育てる」という視点で講義をすることも必要ではないか、との発言があり印象的でした。

このフォーラムで大勢の先生方が、よりよい授業を目指して努力されていることを強く感じました。反面、時に窓口で学生から授業内容や成績評価に関する不満を聞くこともあり、先生方にもかなりの温度差があるのではないかと感じました。(生意気なことを言ってしまう)



「多様なパートナーとの連携」ということで、地域にある大学がどのように地域と連携を探っているかというテーマのはずであったが、報告者は2名が女子大学長であり、一名が私立工業大学の教授ということで、ややテーマとは外れる報告であったようにおもう。

群馬県立女子大学長は、自分の大学をどう地域に認めさせるかということに重点を置き、地域が誇れる大学をつくるということのスローガンにしておられる。それはたとえば全員を留学させるために費用の半分を大学が負担しているとか、「群馬学」という地域に密着した学問領域を立ち上げたとか、とにかく地域に注目される（大学を目立たせる）ようなことをやって、学生が自分の大学を誇れるようにすることがまず第一であると考えている。そのことがひいては地域の誇る大学となり、そうなれば地域の方で大学に何か求めてくることになるだろうという。大学の方から、たとえば役所に出かけて連携を求めても実りはないだろうと。教員の改革は、教員に求めてもだめなので、トップダウンでまず動いてくれる教員を優遇することからまわりをだんだんに動かしてゆくという長としての発言であった。

ノートルダム清心女子大学長の話は、アメリカの大学との比較をしながら日本における女子大というもの の存在意義を明確にすることで、女子大の生き残りを模索しているという話であった。やや話が理念的なところに流れ、具体的な地域との連携例はみられなかった。

広島工業大学教授の報告は、私立工業大学が地域と連携するといっても、科研費の取得や特許の取得数をみても、旧国立大学が圧倒的に多く、一私立工業大学で、なかなか企業が注目してくれるような研究は出来ないということであった。地域との連携といえば、せいぜい障害者のパソコン使用を学生のボランティアで支援するという程度であるとのことであった。

ということで、多様なパートナーを見いだすためには、大学自身が多様かつ特色的である必要があるが、それは規模の大きい大学ならば可能かもしれないが、小規模で特殊な立地条件の大学では、多様であることそのものが無理だろう。多様でなくとも何らかの特色を出すことが地域の賛同を得、また連携をもとめられることになるだろう、ということなのであろう。FDという観点からだけ見ればあまり参考になる話は出てこなかったし、教員の意識改革など無理でトップダウンしかないという感じであった。

第7分科会 授業改善—新しい時代における授業のあり方を探る

シンポジウムへの申し込みが遅くなったため、参加できる分科会は第7分科会しか残っていなかった。人気のない分科会かと思ったが、そうではなく「授業改善」はFDのメインの活動でもあり、広い会場が割り当てられた参加者の多いものであった。

発表は、「ビジュアルリテラシーを糸口にしたワークショップ型授業の開発」「日本語表現法 10年間の歩みと学生の学びの支援」という2つの具体的な授業方法の例の紹介と、「授業開発物を通じた授業改善支援」という名古屋大学高等教育研究センターのおこなっている活動の紹介だった。

前二者の発表は、参加体験型の授業とか視覚的な要素を取り入れた授業の提案ということだったが、国語科や日本語表現法に関しての具体的な授業に関するものだったせい、この分野から遠い私としては、特に参考になることは感じられなかった。それよりも、最後の授業改善支援の報告の方が印象に残った。名大高等教育センターは「成長するティップス先生」など授業改善のヒントになることをまとめて、ホームページや書籍に発表している。それによると、授業改善に最も重要な点は、「目標にそった授業デザイン」と「学生を巻き込み参加させる」ことだという。それは当然のことのように思うが、今まで大学の教員がそういうことをあまり考えてこなかった、

ということだろう。わかっているけれどもなかなか実行できないという人を支援する意味でも、このセンターの活動は意義がある。

今回のFDフォーラムに参加して感じたのは、今まで大学で一般教育や専門の教育をおこなっていた人文科学や社会科学、自然科学の専門家が教育方法を模索しているということだ。教育学の専門家にしたら当たり前のことを言って騒いでいるのかもしれない。教育学の専門家との連携が少ないように感じる。もちろん大学の教員が授業改善を考えるのは良いことだけれど、もっと教育学の専門家の意見を聞いてみるべきではないかと思う。

[資料]

第10回FDフォーラム プログラム

【開催日程】

日程：2005年3月5日・6日

会場：同志社大学、キャンパスプラザ京都

【第1日目】2005年3月5日（土） 同志社大学今出川キャンパス「寒梅館」

13:00～13:10

開会挨拶

13:10～14:10

基調講演『21世紀国際社会と日本の大学の使命』

講師：猪口邦子氏（上智大学法学部教授・前軍縮会議特命全権大使）

14:30～17:00

シンポジウム『誰のための評価？』

コーディネーター：松下佳代氏（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）

パネリスト：清水建宇氏（朝日「大学ランキング」編集長・朝日新聞論説委員）

山田礼子氏（同志社大学教育開発センター副所長・文学部教授）

木野 茂氏（大阪市立大学大学教育センター副所長・助教授）

17:00～17:25

大学コンソーシアム京都事業説明

17:30～19:30

情報交換会

【第2日目】2005年3月6日（日） キャンパスプラザ京都

9:30～11:40 分科会（午前の部）

13:00～14:30 分科会（午後の部）

<第1分科会>授業評価のあり方

<第2分科会>意欲の喚起と動機付け

<第3分科会>FD活動の組織的取り組み

<第4分科会>高大の接点としての大学入試

<第5分科会>多様なパートナーとの連携とFD活動

<第6分科会>特色のある大学教育プログラムと学生支援

<第7分科会>授業改善－新しい時代における授業のあり方を探る

<第8分科会>大学生の変化と大学教員の課題－新たな『教育の評価』

14:40～15:00 大学コンソーシアム京都事業説明

15:00～16:00 10周年記念懇話会「FDフォーラム10年間の歩み」

2004年12月25～26日におこなわれた全学FD研修会については、前号（第12号）で報告しましたが、参加された高橋英児氏から感想をいただきましたので掲載します。

全学FDに参加して

高橋英児

これまで学部でのFDには何度か関心を持って参加してきましたが、教育人間科学部、工学部、医学部三学部合同による全学でのFDは初めてということもあり、私にとっては大変興味深い研修会となりました。実を言えば、年末のしかもクリスマスという時期と言うこともあり、最初はあまり積極的に参加したとは言い切れないのですが、気付いたら、興味深い問題提起と議論が行われる中で熱心に参加している自分がいました。

研修に先だって行われた寺崎昌男先生の講演は、FDが求められる社会的背景を分かりやすく説き、かつ、ご自身の立教大学での実践を例にしながら、今の私たちの教育実践を見直す視点を提供してくれたように思います。特に、先生が立教大学の歴史を学生に語る、という取り組みから、「学生は居場所を求めている。自分の立ち位置を考えたいと思っている」と気付かれた点は、重要だと感じました。私自身は、それを、目の前の学生理解と授業づくりをどうつなげるか、また「教養」とは何か、という問題提起だと受けとめています。また、組織体である大学の仕事として先生が挙げられた、機関のミッション（教育機関として）と個人のミッション（研究と教育）をどう接合していくのか、という点も今後の大学運営を考える上では重要だと感じました。

研修で話されたテーマは、共通教養科目が中心でしたが、どのテーマでも活発な議論がなされ、時間が足りないと感じました。どのような教育を行っていくのか、という点に関して、十分な議論をして、共通の土台を作っていくという当たり前の事が改めて重要なことを確認しました。共通教養科目の一つを担当しながら、その科目が全体においてどういう位置と役割を果たしているのか、という点に関しては自覚がなかった事に改めて気付きました。どのような学生を育てるのか、そのために必要な内容と方法は何か、という合意づくりを大学の組織の仕事として、また個々の教員の意識的な取り組みとして行っていくことが今後は求められると思います。

最後に、今回のFD研修では、理念や組織および制度に関わる事柄が中心となって行われたように思います。今後こうした取り組みを続けていく事を考えた場合、本学部のFDで行っているように、教員の日々の実践を持ち寄って具体的に検討することも重要ではないかと思いました。また、一部の教員だけでなく、学生の教育に携わる全教員がこうしたFDに少なくとも一度は参加することも、自分の今回の経験を振り返っても重要だと思います。

第3回学部FD研修会開催！

3月9日（水）13:15～14:45、J号館5階のA会議室にて、今年度3回目の学部FD研修会が開催された。「ルードヴィヒスブルク教育大学における教育・研究に関する報告—国際交流から見える教員養成教育と研究活動におけるFD—」と題して、昨年12月に国際交流委員会を通じてルードヴィヒスブルク教育大学を訪問したことが報告された。「1. ジェンダー研究に関するセッションの経験から（秋山麻実氏）」「2. 学校訪問と教員養成教育について（小島千か氏・秋山麻実氏）」「3. 今後の研究・教育交流について（川村協平氏）」の報告に続いて、質疑がおこなわれた。参加者は報告者も含めて、教員・院生・職員など24名。（1）